

学びの法則

**伸びる子には法則があった！
ついにメルマガで公開**

第0回

私は 20 歳で学習塾を立ち上げて、2018年で 30 年になります。創業時はマンションの1室で、小学校4年生から中学校2年生までの生徒 40 人からスタートし、数学と理科の2科目を全学年で教えていました。その後、高校生まで含め全ての教科で指導し、以来この 30 年で、私は3500 人以上の子どもたちを指導してきました。一人当たり1年教えているので3500年分ということになります。

教え始めた頃の2、3ヵ月の間は、宿題をたくさん出し、演習を数多くやらせるといった、いわゆるありきたりな「量をこなせ主義」で教えていました。ところが、結果を見ると、一時的に成績は上がっても、その後また落ちてしまう子どもが出てきました。

「どうも、このやり方はホンモノではない」と私は気づいたのです。

塾を始めてしばらくして、子どもたちへの教え方が間違っていることに気づいたのです。それからは、「どうすれば、成績が上がるだろうか」と苦心して考えました。当時、私は、企業経営者と知り合う機会が多く、こうした異業種の方々との付き合いのなかで、部下指導などの苦労話を聞き、「なるほど」と思うことが多々ありました。さらに、子どもたちを日々指導するなかで、新たに見えてきたものがありました。

その見えてきたものが、「**学びの法則**」でした。

この法則が見えてくると、それから一年の間に、子どもたちの成績は一気に登り坂を駆け上り、飛躍的に上昇しました。

最初に入塾してきた中学2年生のレベルは、5段階の成績のうち3や2という子どもが大半でしたが、1年後、中学3年の4、5月段階での成績は、全ての子どもたちが5、4をとるようになっていました(8割の生徒が、5でした)。勉強は量より質であり、「学びの法則」の威力をつくづく実感したのです。

学力を高めること、成績を上げることは非常に簡単なのですが、多くの場合、勉強をすることに焦点が当てられてしまい、実は肝心な要素がおろそかになっているために、難しいと感じているのです。実は、勉強、仕事、人生、全てまずは「学びの法則」を知ること、うまくいく土台ができるということを是非皆さんに知って頂きたいと思って筆を執りました。

それでは、「学びの法則」とは、どのような法則なのでしょう。

それは、はじめに心の状態(心をしつける)に焦点を当てています。次に、いわゆるしつけにあたる礼儀(体をしつける)に焦点を当てています。そして、最後に、効率的な頭の使い方(頭をしつける)に焦点を当てています。つまり、しつけていくことが重要なのです。しつけるとは習慣化と言っても良いでしょう。

私が「学びの法則」をこのたび公開しようと思ったのは、現在の教育が子どもたちにとってあまりにも悲惨極まりないものと感じたからです。多くの教育現場では、子どもたちの心の状態を無視した指導が横行し、知識を教えることはあっても、覚え方や勉強方法を指導することはない状況に、怒りに似た思いがあったからです。覚え方を教えないで、「覚えてきなさい」はないでしょう。勉強方法を教えずに「勉強しなさい！」はないでしょう。これではできなくて当然ですよね。

挨拶や時間を守るといった、いわゆるしつけについては、勉強と一切関係がないように思われるかもしれませんが、実に大いに関係があることもわかっているのです。このような、私の30年に渡るの指導実績を踏ま

えて、これらの内容を集大成し、「法則化」という形で公開しようと考えました。

世の中の多くの人たちは、勉強は嫌なものと捉えています。私もはじめはそうでした。また、私が指導してきた子どもたちも皆そうでした。しかし、勉強は本来楽しいものであるはずですが、しかし、現在の教育現場はその考え方の土台が何か間違っているために、子どもたちから楽しさを奪い、行き詰っているように思います。

仕事の関係で海外に行くことが多い私ですが、その度に訪問した国の学校を訪れます。そこで感じることは、欧米では明らかに学ぶことの根本を理解して教育が行われているということです。日本は知識をどうやって詰め込むかに焦点が当てられていて、その結果、大量の宿題やテストに追われ、持久力か記憶力のある子だけが勝ち残る競争レースが常態化しています。

こうした現状をほとんど多くの日本人は感じ取っていますが、日本の教育は相変わらず変わりません。仕事の上でも、日本は繊細な技術を高い勤勉性を持ち合わせていながらも、欧米に後れをとっている部分があります。ひとくりにすることはできませんが、欧米は勤務時間よりもその成果という部分に焦点を当てており、また家族との時間を大切にするため、どちらかというと仕事ができる人は、プライベートも充実しているという事実があります。いつから日本はゆとりを失ってしまったのでしょうか。ゆとり教育が日本の学力を下げたと騒がれたことがあります。これはゆとり教育に問題があったのではなく、単に時間数を減らして、教科書の内容も削減するという本末転倒な施策であったことに本質的問題があります。教育にとって何が重要であるのか、根幹とは何か、目的とは何か、このような最も重要な議論がされずに、形式だけ整えるといういつもの悪いパターンがゆとり教育という言葉で問題視されたと思っています。

もし本当に子どもの成績を上げたければ、私がこれから述べる「学びの法則」を一つでも二つでも実行してみてください。向上への歯車が必ず回りだします。

また、「学びの法則」は、社会人にとっては部下への指導のあり方、さらには自己改革へと応用できるようになっています。詳しいことは、本メルマガの中で述べていきますが、ポイントは全て**“日常生活のあり方”**にあります。

日常生活のあり方は人によって随分異なります。異なっていて当たり前ですが、習慣には良い習慣と悪い習慣があるように、日常のあり方にも、人生を良いサイクルに回していくあり方と、悪い方向へ回していくサイクルがあるのです。頑張っている割には成果がでないという人も世の中にはたくさんいます。このような人は、仕事のやり方を変えるのではなく、**日常生活のちょっとした習慣を変えること**で、間接的に仕事がうまくいくようになっていきます。もちろん子どもであれば勉強ができるようになるのは当然のことなのです。

本メルマガでは今回を除き、全、日常生活のあり方で、何が大切かということを述べるにとどまらず、何を日常生活で実践すればよいかに力点をおきました。そうしなければ、成果に結びつかないと考えたからです。読みやすく書いたつもりです。あまり気負いをせずにできる部分のみをやってみるという感じで気軽に実践し、「学びの法則」を体感してみてください。そして成果を楽しんでみてください。